

92
195

十六州紀行

022508-000-1

92-195

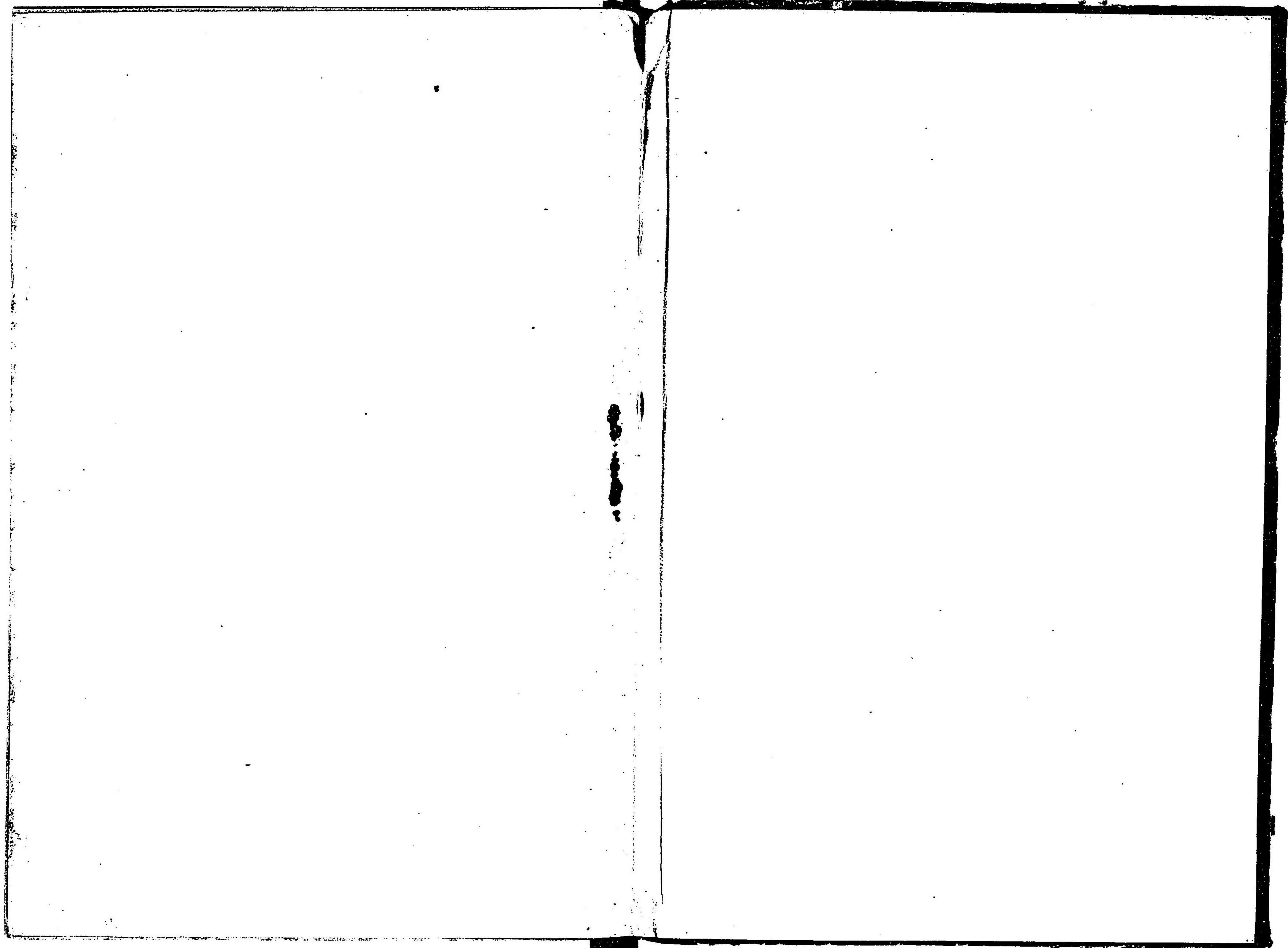
十六州紀行

玉井 梧南/著

M35

ADB-0179





十六州紀行

枝原七十八翁悟南

我等夫妻金婚式を舉げしは三年の前にあり

今茲明治三十五年は予七十八妻會乃六十

八の齡となりぬ春はや

清明の好時節に

向ひしに一夜夢に富士を見て覺て頻に見

ゆるきてよとて俄に旅の用意して四月六日

首途しぬ

富士の夢花に鳥啼く夜明か那

富士は召し花は招きぬ此首途

維新今日の旅行は流車の便ありて一晝夜

百里の路を座して往復し得へしその上に

郵便電信などの設ありていかなる邊土も

通信ならざる所なし我等老の足弱も大か

たの道を流車に頼みて所々下車し名所古

跡猶花咲里を隈なく見んと期しぬまれそ

長生して此聖世に逢へる幸福といふへ

君か代や花の七日に流車千里

とよるく花に用意や杖二本

見送の人達の老の旅寐をそれまれと介を

へせらるゝに答へて

爺婆々か花に曳合ふ皺手かな

木曾川を過る

みなもとの木曾は雪あり春の水 會乃

清洲驛を過る此所に織田公の城趾あり太

閨記にいふ信長没後其遺臣ことくく此

清洲に會して主家の善後策を講しぬ柴田

勝家の陣暴なる羽柴秀吉をして已か脚を

按摩せしむと此評議終に何の得る所もな

かりけり

下多くと蛙の清洲評議かな



名古屋

朝霞鮎は名古屋の名物ぞ 曾乃

参河路に入るに参河萬歳とて年々此邊より出ると聞て

萬歳や鼓に代て今日は鉦 曾乃

桶狭間

陽炎や土三尺の未死の魂

豊太閤木下藤吉郎たりし時のいさをしを

かもひ出て

猿冠者や非凡な柿の拗切振

八橋の杜若は三河の國の名所なり

杜若元祿武士の出所か那

豊川稻荷社は此所より北一里程の禪寺の

境内にありて遠近の國々より参詣する人

夥し

豊川や福徳祈る春の人

ほととぎす石に化せしは何故曾

天龍川の東岸池田の里に熊野待従の墓あり

り諸曲の詞を思ひ出て

流車の窓より見る所

流車早し替れ桃櫻それ柳 曾乃

遠州灘

真帆あけてのたる船あり春の海 曾乃

興津驛に下車して清見寺に詣

富士も三保も寺の物なり花の庭

三保の松原

藤太か箭霞にのたる松や射ひ

松頼む藤羽衣の詠めか南 曾乃

興津驛に泊る

春の宿蚤にくはれし一夜かな 曾乃

焼津驛を過る此所は往昔日本武の尊の舊

昔は東海道五十三次とて往來人馬は常

に織るか如く大名衆の行列のいかめしき

あり参宮道者の三人乗馬上に音頭を唱ふ

ありて膝栗毛の彌次郎兵衛喜多八か旅の

俯見へて面白おかしき花の春なりしも瀧

車の便のひとたび開けてよりは三百年來

さしも賑ひたる行路の塵も跡消てなへて

常の村落とはなり果ぬ

馬駕の春の行術か並木松

天龍川橋上

遠霞不二の見ゆるは此所からぞ 曾乃

東海道小夜の中山は此線路の北にあり往

還の道にひとつの怪石横たはりて里人去

れを夜啼石といふ何の由緒あるを知らず

予も壯年のころ彼所を過て石を見たり其

形今猶彷彿たり

跡と聞議て

米麥にけふは培ふ焼野か南

富士川懐古

水鳥や羽風にちりし木の葉武者

田子の浦に富士を望

富士南面す霞む足柄北面か

御殿場驛に泊る

富士の裾に宿とる春の夕哉 曾乃

富士の方へ枕して寐む臘月

早起富士を望む空は雪麓は花

空に殘月あり

曙や月雪花の富士の山

富士の山

富士の山自然の美かな美なる哉

蓬萊といふ字名あり富士の山

裾野に遊ひて

赤人も一夜寐に來よ花菫
日に土筆四五本摘て捨にけり
菫つひちいさき女こゝろかな 曾乃

箱根山

八州の咽首鎖す霞かな
雲に入る鳥こへゆきぬ箱根山 曾乃

松田山北兩驛間の陸道を越て

横切て轍にふれぬ朝の雉子
四五軒て一村つゝか桃櫻 曾乃

箱根の湯本に宗祇法師の墓あり

ちる花や法師か美髯二尺強

同地早雲居士の墳墓を望小田原北條氏五

世の事をおもふ

茶々斬た意氣稻妻に似たる哉
地理見たか伊勢から此所へ種あるし

大磯驛仮粧坂の名を聞て

西行の草鞋用なし花行脚

此句に即坐たはむれて

老同士や花の旅にも足袋頭巾 曾乃

江の島

夕波や富士の濼ふ浦の春
蛤よ此江の島の景色咄け
奥底を何てためさん馬刀の穴 曾乃

龍の口寺の門前を過て昔を思ふ

日蓮の首恙なし佛の座

腰越の里を過て歴史をおもふに義經兄頼
朝の意に戻りて鎌倉に入るを得ずして此
腰越より西せし後遂に潜匿の身となりて
陸奥の國へ落ゆさしまては古跡を存する
も世に其終る所を區々に申傳へて或は今
の支那帝愛親覺羅氏の滿州より起りたる
遠祖を出し清和源氏の清の字に因みて國

さぬくの柳は名のみ残しけり

曾我兄弟の古跡は南の方一里程の曾我村
に有諸曲元服曾我に菊の名の曾我の古里
と有小袖曾我よ母は時致の勘當を許し狩
場へ行を送りしとあり夜討曾我には家の
子鬼王團三郎兄弟をさとしつ叱りつして
母への筐を持せかへせしとあれば

菊の名や男になりし曾我五郎

母子草逢ふも名残も一目か南

照射せんと二兄弟の泣く夜かな

海水浴

海の水ぬるめと浴猶早し 曾乃

鳴立澤

春は此鳴立澤も蛙のな

藤澤驛に下車して腕車を雇ひまればより鎌

倉江の島の名所古跡を一見せむとて

を清と名つけしなどの説もありいかゝあ
るへきや

藤鷹の行術や蝦夷か西比利亞か

七里か濱より稻村か崎を望

太刀魚や誠の太刀の子孫かも

鎌倉に入て其所此所と古跡を見廻り歴史

の事ともおもひ合せて

源氏

月昏し七騎這出る杉の窩
源平の桃もついで花白し
中原の鹿獲た腕を富士の猪
同じ根の筍を煮る鼎か南

政子

夢どかへし鏡や裏は夜の梅
植かへも接木も尼の手際かな

北條氏

身は従四位四海の春を掌に
貞永の花や青砥かはした錢
民安し雪の鉢の木焚てより
月花や入道殿は犬の宴
承久元弘の往事を歎き奉る

承久の秋は無愁な月日かな
あなかしよ御座は鷹の歸る空
義時のこゝろ鋭し秋の霜
新左か口人や千秋手に汗す長崎新左衛門尉を云
御謀反の文字や誰か口土筆

大佛天首も膝もさくらかな 曾乃

長谷

花の香や初瀬の弟の古観音

鶴か岡八幡宮

神垣や菊氣によまれぬ花幾世

事して其覇業を補佐し功働あり
細工司は京の人なり五月武者

葛原か岡は藏人右少弁俊基朝臣終焉の地
なり明治廿二年吉野に神社を建られ官幣
社となしたまひぬ太平記に俊基朝臣再ひ
關東下向の路次菊川にて「古もかゝるた
めしを菊川の同じ流れに身をや沈めむ」
との詠歌あり終に鎌倉にて誅せられたま
ひし時の事ともおもひ出て

菊見ても命は露の旅寐かな
鬢の毛を都の花に形見かな

刀匠正宗の屋敷跡に稻荷の社あり
初午や刀鍛冶屋の名は今に

後白河法皇頼朝か其父義朝の廟を營むと
するを聞てしめされ功勞を賞したまふの
餘りに判官に仰せて東の獄屋の邊に探り

鶴か岡の若宮殿は昔義經の愛妾静か舞を
かなてし所なり

海棠の雨の色香や想夫戀

大塔の宮御最後の地鎌倉の宮に涙を濺ひ
て

春悲し穴の中かも呼子鳥

頼朝屋敷を見る

春麥や畑租何級幕府跡

頼朝屋敷の北の山腹に右大將頼朝公の碑
有其東に大江廣元の碑有又其東に島津豊
後守忠久の碑ありて三氏の墓碑並ひて隣
をなしぬ

明治の春薩と長とや隣同士

鬼武の種し實はへかけふの桃櫻

大江氏はもと京家有職の事を累代にせし
家柄なり廣元に到て鎌倉に入り頼朝に奉

求め義朝か首に鎌田正清か首をそへて公
朝を勅使とし下されければ文治元年九月
三日の子の刻に此大御堂か谷の南の御堂
に葬りしとなり

此土に魂喚すへし落椿

晝窟俗に晝かさやくらといふ窟中に二位
の尼と實朝との塔あり當時公曉か實朝を
斬るや首を提て逃れぬ實朝を葬るの日其
首のなかりければ館を出るとて髪をくし
けすり一髪を侍臣と與へしを首にかへて
葬りしとあり

首の無きなきから悲し魂祭

其角の五元集に建長寺詩なければ人を俗
了にすと題して爰に詩なし我に俗なし夏
木立の匂ありおもひ合せて
予や俗か精舎の花も酒はしき

梶原屋敷世に梶原氏といへは奸曲どのみ
言囉せども嫡源太は風雅もありし人なり
と聞は

太刀風や箴に梅を匂はせて

元の將軍伯顔は江南に軍して凱歸の途に
江南の物とは取らざるも唯梅花兩三枝
を携へて歸りしどの風流にくらへて

伯顔も氣つかぬ梅の箴かな

横濱港に湧川氏母子を訪ふて舊時を話す

花年々人は老けり十二年

横濱居住の西洋人か共有公園花屋敷を見
る

ちる花に美人の鬚の茶色哉

流車に登りて東京におもひくに鶴見を過
るころ同室に西洋の人達の三四名首を聚
めて何やらうち語るを聞も我等は西洋

語を解せざるに傍に並ひ居ける書生体の

若者のあの嘯は日本に來しよりもはや吉
野嵐山の花を見て明日は上野隅田川の花
見んどのことゝもなりと教へくれければ

獨逸語も解けは花の嘯かな

東京に到て親族なる根岸の里の春光堂に
寓居しぬ此地は東京市の内なれども田舎
の風情も見へて清閑なる上南隣に鶴を養
ふ家あり折ふし其聲の聞へければ

長閑さや垣をへたてゝ鶴の聲

又東隣に鶯を飼へる家ありて終日春聲を
我園に送れり主を問へは女なりと

鶯や飼主は誰か愛妾

皇城を遙拜して

九重の霞尊し高御座

上野の花を見る

大君の都はまゝそ花の名も

君が代の花や花見の人も花 曾乃

我等老の夫婦のはるゝ來てけふ都の花
を見るうれしさを

長生の夫婦めてたし花の陰

上野の動物園

鶯や園園の獅子を見る後

けふは向島の花見ひと事間の渡を越へて
渡し守花の近道答へけり

木母寺中梅若堂

呼合ふは親子雀か堂の軒

木母寺や時鳥かど聞は鶯 曾乃

隅田川の花

折られねど路はどかめぬ落花哉 曾乃

たまゝ盲人の手を曳れて花の陰を行を
見てあはれと見やりつ其盲人よ代りて

此句ひ心よ花の色白し

隅田川の都鳥は昔業平朝臣の歌に名をし
られてより名所の景物となりぬる年久し
貞室の句にいさ登れ嵯峨の結くひに都鳥
と有て此隅田川の産れなれば京よりは鄙
の鳥とやいふへきに今や

高御座を移させたまひし東京は我日の本
の第一の都とはなりぬ鳥の名も誠の名と
はなりぬへしこれを都鳥に告て

都鳥都はそちか故郷そよ

此邊は餅も團子も名物なれば

餅盛た盆へちり來る櫻かな 曾乃

言問や花に伴ふ團子の名

歸 途

鶯や小梅の里はまた夕日

藤氏に伴ふて小金井の花を見る此所は享

保年間舊幕府の工事として多摩川の水を
十餘里の遠より掘通し江戸の飲料水とな
したる時其水道の兩岸へ吉野山の櫻を移
し植て今此全盛をなしといへは
江戸中へ花の香配き御茶の水
二所て爲なきぬ花の中 會乃
武藏の國人間の郡所澤驛藤氏の家に宿る
今朝見れば富士よ雪増す余寒哉
小金井の花は水路兩岸凡四里程の所に老
櫻樹あり所澤よりの歸途再び杖を曳て
花の杖唐の路なら六十里
市中の雜事
馬車通る町に尊き柳かな 會乃
鮓店や町あるく口の水驛
小原女に拐せ香西の田螺賣
日本橋の魚河岸を見る

魚河岸や藻魚金線魚春の色
白魚の白さたとへん色や何 會乃
此日珍らしく初松魚を見る
初松魚冬は鱒くふ男かな
飛鳥山の花見んとて寓居の主に笑れぬ
箒熊手持てといはれてけふも花
道 灌 山
春草や道灌山の産胞衣地
花見寺
美しくしき名に立よりぬ花見寺 會乃
深川の地は元録の昔世蒸翁の正風俳諧を
唱導せられし舊地なりたましく此地を過
て其門葉の聯綿相傳へて遍きをよるこひ
遺徳を仰ひて
植し世蒸花咲實なり實はへ哉
松島の勝を探らんと東京を立出て

行鷹に交りていさや陸奥の道
千葉縣の邊に君待橋てふ名所のありと聞
て
まよとらし君待橋の時鳥
滑川驛の邊小御門の神社は尹大納言師賢
公を祀る官幣社なり公嘉曆二年八月廿四
日の夜 後醍醐天皇の笠置へ遷らせたま
ひし時 主上に代りて 帝と稱して山門
へ登られし昔を思ひて
比叡の秋御衣のみ月の臙かな
香取神社の神木を木母杉といふ此神社は
神武の御宇十八年の祀祠と聞て
春風や紀元の色の木母杉
潮來の里は昔より娼家に名あり潮來十二
の橋と俗に言囃されし地なり
さぬくの橋は十二の時鳥

鹿島神社
地軸ぬく石の要や神の春
筑波山
春風や紫匂ふ女夫峰
此邊は古歌の名所として筑波根の峰より
落る水無の川戀をつもりて淵となりぬる
とあり
ちる花の果かみななの戀の淵
又戀瀬川てふ名所あり
戀瀬川摘菜の人か脛白し
天保年間世に攘夷論の喧すしかりし時常
陸の國は領主水戸烈公の指揮する所寺々
の梵鐘を集めて大炮を鑄られしより此國
の寺院に鐘のあるは酒井村某寺のみなり
と聞て
物足らぬ壽や鐘なき常陸道

水戸の常磐公園は満目梅あるも花の時ならされは

鶯と梅の行衛を惜みけり

弘道館

日本史を編れし梅花書屋哉

大洗海水浴旗亭にて

初松魚船から上げぬいさ贈

初松魚口に七十五日かな 曾乃

大洗の地は海へ突出したる岬角にして青

松白沙の濱に奇異の岩石の海中に基布し

たる景色の名所なり山の半腹に磯前神社

あり社殿の後の平地を小松か原といふ水

戸烈公の歌に萬代を松に契てけふまでは

子の日の松に曳れ來にけると刻みたる碑

あり

小松曳て植たし浦のさゝれ石

平瀨灣

此海のあなれ亞米利加雲霞 曾乃

平瀨灣は青松白沙の海濱にして陸三面よ

りは洞門を潜りて到るの地なり太平洋を

一望するの景色は常磐線路中に冠たる名

所といふへし濱邊に芭蕉翁の句此所眼に

見ゆるもの皆涼しと刻みたる碑あり洞門

を出て勿來の舊趾常陸磐城の國境より又翁

の句風流の初めやをくの田植歌と刻みた

る碑を見たり翁の詠れし地とは異なるれど

土地代へて又も新らし夏の二句

勿來の關趾

ちる花にはしきは馬と鎧か南

塩竈に到る

塩竈や調度來合す祭の日 曾乃

塩竈や花に鶴飼ふ社家の園

千賀の浦

雉子鳴くや千賀の浦へは右の道

都にて千賀の月見し大臣かな

海濱の春色鳥鳴き花匂ふの曉塩竈より扁

舟を雇ふて松島に涉らんとしぬ先づ離島

を右に詠め過て千賀の浦を漕出れば忽に

浪に漾ふ幾多の島嶼を一望の内に収めて

其大なるもの小なるもの遠きもの近きも

の或は舞ふか如く嘯むか如き坐するか

如く眠るか如き或は島根に洞門を開てこ

ゝより舟を遣れど招くか如き或は嶼腹に

石窟を穿ちて茶を煮酒を温むる客を待つ

か如き舟行の次第に隨て千狀萬態前に對

して親しめは後に妬み右に精しければ左

に疎く舟に坐して指願するに暇なし其島

嶼に生立てる松は海風に荒みてやゝ矮少

なるも其姿は虎倒龍顛して綠千年の色を

なしぬ此の如き島嶼の間を徐に漕行つゝ

扇谷大高の森等四五個所に舟をよせて歩

して高きに登り全景を詠むるなど舟行粗

十時間にして松島の灣に入り上陸しぬ此

松島の全景たるや長五六里幅四五里を劃

して造物者の無盡藏中特種の別天地とい

ふへし之を縮小して評せば或は相阿彌は

どの名手か生涯の意匠を凝らして作り出

せし一盃裁と言んのみ

松島や此盃裁は誰か細工

松島や曳のこりたる鶴か舞ふ 曾乃

五大堂にて民部卿忠教の歌に踏わけて渡

りもやらす紫の藤咲かゝる松島の橋どあ

れば昔此所に藤の花の咲ありしと見へた

り

此松は藤咲せたし五大堂

瑞巖寺は伊達政宗侯甲冑の像を見る

雲の峰獨眼龍は射る南

陸奥の國は我等か故郷とは遠く隔りて風土人情に感ずる所多し

鶯に國の訛はなかりけり

末の松山はこゝにもあれど陸奥二戸郡浪

打村にも其名有

春の夜や和歌で戀する誰と誰

野田の玉川を尋しに時やよひの末なれば能因法師か詠められし千鳥は影たも見へず折ふし此邊に山吹の一もと咲あるを見て

山吹や井手の詠めも此水に

壺の碑

奈良朝の文字苦むしぬちる櫻

名取川此所は昔法勝寺圓觀上人調伏の事

に座し捕はれ人となりてみちのくへ下向の時此川にてみちのくの憂き名取川流れ來て沈みはてなん瀬々の埋木と詠れし所なり

僧の罪洗へ名取の春の水

蘇村翁の新花摘にいふ松島の天隣院にて千秋をふるてふ名取川の埋木の板をもらひて白石驛迄携へ來しも前途の勞を厭ひ旅舎の簀の子の下に捨置きし云々其後のことは新花摘に委しければ此に畧しぬ汗かいて負ふや行脚の貰ひもの

源頼義義家父子兩將軍の前九年後三年此奥羽の野に戦ひしは歴史に載て委し

前九後三武家の親仁も種蒔か

旅のつれく嵐雪子の裝遊記を閱するに

仙臺林子平氏の墓

春燃る草の根や誰何君か眼に

仙臺八つ塚に局淺岡の墓有淺岡實名三澤初子といふ伊達家の局役を勤めて其忠義人口に膾炙す墓の傍に仙臺侯曾て異邦より取よせられしといふ伽羅樹有今繁茂して花を結ひぬ

女丈夫を埋めし土や伽羅の花

仙臺躰か岡の花を見る此所一名釋迦堂

といふ

釋迦堂の花宮城野の吹雪哉

羽織着た角力に逢ぬ花の山 曾乃

昨日躰か岡の花を見しに元録年間綱宗侯の植置かれし花とて二百年を経來りたる老櫻樹の今を盛りと咲亂れたる景色のさしもに名殘惜まれてけさしも再び雨中

元録時代の旅の様今猶目前に見るか如し

其記の内に東海道吉田驛より伊勢地へ便船し海上風雨の爲に三日餘も飄流せし末辛していらこ崎を見つけ藤波に鵜は得たりいらこ崎の匂あり又京の旅難に亡妻の魂迎して魂祭こゝか願の都なりとの匂あり今や漁車の便を頼みて我等老夫婦か此みちのくの長途も安々と來たりしをよろこひ時勢の變りたるを感して

君見すや花に千里の夫婦旅

武藏坊弁慶は一世の強勇法師武者なり義經に供して此みちのくへ下り衣川にて討死せしことは世に傳ふる所なれども俗に弁慶の立往生とて立なから死せしなど誠しからぬこといかにあるべきや

弁慶の死振見しか川千鳥

杖を曳て

旅人と呼きて花よ雨嬉し
途上八幡公伏兵亂鳴の昔を

兵法はあれか並んで歸る馬

老の夫婦杖を曳て武隈の松を見る

尉と姥松の霞を汲む口か南

白石驛に菊面石を見る

菊石や露か匂ひかもしあらは

伊達の大木戸の跡

伊達の木戸春美しくしき往來哉 曾乃

北畠顯家公の舊跡靈山神社を遙拜す

五百年安部野の春や維新より

佐藤莊司の古跡は大作山一名鵬山に有義

經弁慶の遺物嗣信忠信か幼時の玩弄物な

とは山の麓井佐の里醫王寺に有

攝待にちさき兜巾の涙か南

義經牛若丸たりし時金賣吉次に伴ふて陸

奥へ下り秀衡に依て時の到るを待しに兄

頼朝の旗を擧るを聞て蹶起して向ふ所敵

なく終に平家の一門を西海に亡はせし武

勳の著しかりしも端なく兄弟の間に隙を

生して落人となり姿を山伏に扮し再ひみ

ちのくへ下りしことは世に膾炙する所な

り前に陸奥へ入し時の意氣と後の時の感

慨と異なるをかもひやりて

篠懸や冠者て來し日は春なりし

忍文字摺石は翁のかくの細道には里人の

山よりつき落して石面下様に埋もれて有

しとしるされしも維新の後某郡長の主唱

して石の全面を掘出し今は垣結ひ廻し傍

に河原の左大臣のみちのくの忍文字摺誰

ゆへに亂れそめにし我ならなくにの歌の

來て見れり董の野あり軍跡

翁の田植歌の句殘

苗代や未だ乙女等の内仕事 曾乃

西行法師清水の柳謠曲に遊行柳と有

西行と遊行との名の柳ありな

奈須の八幡宮は奈須の與市か八島にて扇

の的に箭を放ちし時の祈念の神社と聞て

扇射た與市はこゝの氏子哉

殺生石を見る

春の野や美人の果の石一つ 曾乃

陽炎や今は佛にありし石

宇都の宮浦生若平氏の墓

陵の落花に結ひし帯か南

同氏か生前殊に慕はれしと聞く高山彦九

郎氏を思ひ合せて

櫻田のさくら拜まん今ならは

碑さへ立そへ有此文字摺石の往昔四季の

花を石よしき布の摸様を摺て貢ませしと

口碑に傳へ來りぬ

散花を土産に摺せん忍石

安達原の黒塚にて

黒塚も躑躅は赤に咲にけり 曾乃

折ふし花の陰に乞食共の團居しありけれ

ば

乞食等も飯へ焚込落花か南

遙に會津山を望て戊辰の戦争の事を思ふ

稻妻の納り所や會津山

白河の關能因法師の歌に都をは霞ととも

に出しると秋風を吹く白河の關とあるを

けふの旅寢にくらへて

白河の花や首途の廿二日に

白河は戊辰の戦争地なり

我等老夫婦六年前明治廿九年の春日光山に參詣せり今や途上遙拜して過ぬ

治世三百年維新の春の培養や

小金井驛の東三十町程の所に弓削道鏡謫居の古跡薬師寺有

化け藏主枯野や汝の死所

小山驛は慶長五年八月徳川大將軍上杉征伐の軍を此所よりひきかへし關の原へ向はれし所なり

鴈の夜や伏見の城の危急狀

古河驛に源三位頼政の墓有

魂はこゝ魄は扇れ若芝に

蕪村翁曾て此線路の一里東結城の里丈羽の別荘に旅寝せられしころ狸に魅せられし顛末を其新花摘に書殘されぬ爰には其全文を畧す其裡は終に里人に打こるされ

けるを翁却て憐み秋の暮佛に化る狸う南の句有

颯くひう見たら味増する狸哉

小山驛より道を右折して善光寺に詣んと足利の里を過て足利氏の昔をおもふ

此土地にはへし柳う北靡き

新田の里はこれより北の方に有當年の事を追思して

詔書佩ふ鎧の袖や花の果

途上見る所

門川や家毎に洗ふ蠶籠

曾乃駒とめて袖打拂ふ陰もなし佐野の渡の雪の夕暮と有古歌の名所も今は名のみと聞てよらて過ぬ

花吹雪佐野の渡の春もかな

妙義山

天を衝く峰に瀕たる霞かな

碓氷嶺日本武尊の舊事を想像し奉る

花匂ふ弟橘や吾妻の名

淺間山

煙道ふ淺間の山の笑顔かな

信濃路に入るに梅は十二分櫻は十分に咲有て世に梅を花の兄といへども此所にては同時の花盛なれば

信濃路は從弟の位置か梅櫻

川中島

勝まけは下界の事と雲雀哉

善光寺

花の香や尊き關浮檀金佛

優曇華も交る匂ひやちる櫻

曾乃水内更科の郡の村々は家毎に杏子(本川に加)頁毛々と云漢名には杏といふ今の名はアンズを栽培して實を

土地の産物となしぬ其花梅ほどに白からす桃の紅にもあらて櫻に彷彿たり幸に満開の時に逢て恰も花の世界を行か如し

梅櫻春こき交せし色香かな

曾乃これはく信濃路二日花の中

借問酒家何處在牧童遙指杏花村の唐詩に似たる途上の即事

酒屋何所杏花の村を指さしぬ

月の名所なる狭捨山はこれより一里餘の里なりと聞けど春の旅なれば其方角を指さして過ぬ

狭捨や戌亥に霞む山の腰

熊谷驛に遺生山熊谷寺有熊谷直實の開基といふ直實遺世して法然上人に歸依し無二の念佛信者となりぬ一日馬に乗て東せんとしけるに西の方に背くを憚り後向に

熊谷驛に遺生山熊谷寺有熊谷直實の開基といふ直實遺世して法然上人に歸依し無二の念佛信者となりぬ一日馬に乗て東せんとしけるに西の方に背くを憚り後向に

乘しこの事は世俗に傳へ來りぬ
西へ飛て姿見せけり時鳥

深谷驛の十三町程北に薩摩守忠度の墓有
昔一の谷の戦に忠度を討取し岡部の六彌
太は塚の北岡部村の産にして古跡今猶存
しぬ當時六彌太一將を追かけ組打して首
を取たる時に其箴の短冊に行くれて木の
下陰を宿とせば花やこよひの主なるらむ
忠度と有しを見て初めて薩摩守なるを知
て悲歎の餘りに己か故郷に墳墓を設けて
其菩提を吊ひしとむ哀なることなり
花に宿る客こゝにても御客哉
根岸の里の寓居に歸る

梅の實は最ふ豆ほどや留主十日
藤氏にいさなはれて歌舞伎座の芝居見
る

月花や團十郎も美のひとつ

再ひ上野に春遊尋て
山埋む若葉の中や遅櫻
山の手の町を過て
春風や門々似たる枳殻垣
小石川植物園は大學校附屬の園にして幾
町歩の花畑に種々の卵木を栽培し中央に
幾棟の暖室を構へて内に草木を温め時な
らぬ花の咲あるを見たり天工を奪ふの術
ともいふへし
室咲や秋海棠も春の花
芝泉岳寺の開扉に赤穂義士の遺物を見る
雪に血のいろはの文字や四十七
予凡五十年前の大昔と三十年前の中昔と
兩度新吉原に遊ひしことありしも今や老
て昔の夢のみ残りぬ寓居無聊の餘りにい

さゝか其夢の跡を通りて茲に唐詩竹枝體
に倣ふて新吉原春の詞二十五句を綴りぬ
老のなまめけると世の人の笑ふに一任す

其一

きぬくを見て居る役の柳か南
驅微院美人の二日灸か南
不夜城の朝寝や長さ日も足らず
黄昏や景色調ふ廓の春
櫻植て春賣る夜や此價

其二

朧夜や箱提灯の紋は何
駒下駄に花踏む鶴のあゆみ哉
初花や戀はこれから雲と雨
粉頭の甘子は花の七日か南
容顔狐さくらの仇名か南

其三

遊冶郎花には多し世は廣し
自惚も醉人もさはる柳かな
蝶や抱かれ蜂や抱つく夜の花
愁々鳴く此蜂花に來すもかな
蝶さまく罷て風さる風車哉

其四

誰か家の公子か花を折れと御意
花の價科目ほどの小判かな
黄な蝶やせめて羽色か黄金なら
花の涙意中の人こそ誰ぞ
風流士に花盗人の汚名かな

其五

花に頭巾待るゝは君待は誰
簪や枕にふるゝ春の音
夜三更春濃かな屏風かな
春の夢色情と錢の夜明哉

所感

夢彷彿我れ今花下の劉郎の

其角子の句に闇の夜も吉原はかり日夜か
などあるに戯れて

我は花其角は月か廓詞

根岸春光堂主人其家族の人達に別を告て
驚に根岸の里の名残かな

午前六時廿分に新橋を出て其日午後五時
十八分岐阜に到るの急行流車は登りしに
此日や宿雨初めて晴て季春の大空に一點
の塵雲を見ず品川驛より富士の山を見初
しめ次第く々に神奈川大磯國府津御殿場
等の各驛を経て鈴川驛に到るに或は若葉
の森に並松の梢に見へ隠れして白玉の屏
顔幾度か笑ふか如く或は箱根足柄の峰巒
を踏まへて八面玲瓏の玉顔呼へば答へん

とするに似たり凡へて此驛迄は富士に迎
へられ來し心地しぬそれより富士川を渡
り静岡驛を過て島田金谷に横たふ大井川
濱松舞坂にそへる濱名湖とせんくりに送
られ來て咲のこる花の上もへ立緑の柳の
間は芙蓉峰の出沒してさすがに名残惜氣
に招く風情は誠に富士を見るの愉快を此
半日に盡したりと言んも過言にはあらず
らむか士朗氏のけふも見へけふも見へけ
り富士の山の句をかもふに其幽邃風雅は
當年に秀逸なるも今日にくらへて昔れ人
の富士を見て東海道を行來ふのもどかし
かりしやを此に感して

遅き日や掃つて富士を六十里

菜の花や流車か走るか地か舞ふか 曾乃

岐阜に下車して

行春に流車から下りて別れけり

家に歸る

死ぬ時の土産は出来ぬ富士と花

予未丁年のころ友人と導かれて唐詩を作
るを習ひしに素より漢學に就かされは文
字に乏しく兩三年にして廢しぬそれより
は糊口の業のみを營み漸く齡知命の秋に
到て初めて老後の樂しみを思ふに皇學を
おさめされはてには假名つかひに昏く和
歌の門にも入るを得ず少壯に皇漢の書を
讀まさりしを悔るも餘なく遺憾とせしに
或人のいふ文字を知らされは俳諧に入れ
俳諧は俗談平話にして而も風月を樂しみ
養老の具とするに文字無き輩の第一策な
りと此言に隨て予俳諧に遊ぶ茲に十有餘
年翁の風雅幽玄の旨意を汲て老境の樂事

はこれのみと初めて了し得たり此回富士
松島の勝を探らんと思ひ立ぬるに元録鎖
國の昔と維新文明の今と世の變遷せしは
恰も雲泥の如し翁のかくの細道の行脚に
做ふも昔となりて今の世に何とやらん似
合しからぬ心地しぬれば予は翁の幽玄の
境界を慕ふて精神となし今日の時勢を取
て身體とするの思按を決して密三十日の
旅行に此十六州記行一篇を物しぬこれは
唯に老の旅寐の面白さかかしさを他日の
思出に記したる迄にて章句の拙なきは素
より文字なき予か及はざるを愧しぬ 抑
維新の今日より將來を推見んに日本の文
學に於る唐宋の詩文は従前學者間の文字
にして俗用に便ならず源氏枕草紙の美く
しき言葉も餘りに高尚に過て俗間に用な

し詰り西洋羅何語の如く二つなから學者
 玩弄の古語となりて俗間一般の文學は俗
 談平語俳諧の言文一致に歸せんやも未だ
 知るへからず故に俳諧に入る人の多々ま
 すく多からんことを待つには廣く其門
 を開て内には飽まで翁の風雅を著へ外面
 に或は歴史や詠物や悲壯嶮新の調を容れ
 て文人政客をさそひ或は煙霞に花柳に綠
 意紅情の題を捨す俠客治郎をいさないて
 ことく俳諧門の華實とせば又俗間文
 學を遍くするの餘地ともならむか蕪村翁
 桃李の篇の序に曰いつの程にか四時四卷
 の歌仙有春秋は失ぬ夏冬は残りぬ一人請
 て木にゑらんといふ一人制して曰此歌仙
 有てや、年月を經たり恐らくは流行に後
 れたらん余笑て曰これ俳諧の活達なるや

實に流行有て實に流行なし譬は一圓廓に
 添て人を追て走るか如し先んする者却て
 後れたる者を追ふに似たり流行の前後何
 を以て分つへけんや唯日々に已か胸懷を
 寫し出る今日の俳諧又して翌は又あすの
 俳諧なり題してもゝすもゝといへめぐり
 よめども端なし是此集の大意なりと予此
 序に感して茲に老耄一日の放言のみ呵々
 もゝすもゝ巡り讀せん世の流行

十六州紀行終

明治三十五年五月廿五日印刷
 明治三十五年五月廿九日發行



著者 玉井 梧南

同縣同市同字同番

發行人 玉井 梧一

岐阜市七軒町三百七番戸

印刷者 淺野 兵吉

岐阜市七軒町三百七番戸

印刷所 耕文社

し詰り西洋羅何語の如く二つなから學者
 玩弄の古語となりて俗間一般の文學は俗
 談平話俳諧の言文一致に歸せんやも未だ
 知るへからず故に俳諧に入る人の多々ま
 すく多からんことを待つには廣く其門
 を開て内には飽まで翁の風雅を蓄へ外面
 に或は歴史や詠物や悲壯嶮新の調を容れ
 て文人政客をさそひ或は煙霞に花柳に綠
 意紅情の題を捨す俠客冶郎をいさないて
 ことく俳諧門の華實とせば又俗間文
 學を逼くするの餘地ともならむか蕪村翁
 桃李の篇の序に曰いつの程にか四時四卷
 の歌仙有春秋は失ぬ夏冬は残りぬ一人請
 て木にゑらんどいふ一人制して曰此歌仙
 有てや、年月を經たり恐らくは流行に後
 れたらん余笑て曰それ俳諧の活達なるや

實に流行有て實に流行なし譬は一圓廓に
 添て人を追て走るか如し先んする者却て
 後れたる者を追ふに似たり流行の前後何
 を以て分つへけんや唯日々に已か胸懷を
 寫し出る今日の俳諧又して翌は又あすの
 俳諧なり題しても、すも、といへめぐり
 よめども端なし是此集の大意なりと予此
 序に感して茲に老耄一日の放言のみ呵々
 も、すも、巡り讀せん世の流行

十六州紀行終

明治三十五年五月廿五日印刷
 明治三十五年五月廿九日發行



著者 玉井 梧南

同縣同市同字同番

發行人 玉井 梧一

岐阜市七軒町三百七番戸

印刷者 淺野 兵吉

岐阜市七軒町三百七番戸

印刷所 耕文社

92
195

90 | 105